

令和7年度 学校評価（生徒アンケート）前後期比較に基づく成果と課題について

1. 成果として捉えている点

アンケート結果からは、生徒たちの社会性の向上と、精神面での安定が明確に読み取れる。

• 「あいさつ」と「思いやり」の日常化

「自分からすすんであいさつができて（強肯定）」と答えた割合は、全学年平均で前期 44.6% から後期 48.1% に上昇した。特に3年生では 40.2% から 50.0% へと約 10 ポイント伸びており、学校の顔としての自覚が高まっている。また、「他を思いやる言動」についても全学年で 40.6% から 46.0% に向上し、重点目標が浸透している様子が伺える。

• 「相談できる関係性」の構築

「自分の悩みを相談できる人がいる（強肯定）」という回答が、前期 59.6% から後期 66.2% へと大きく伸びた。特に2年生では 59.1% から 74.8% へと劇的な向上を見せている。教職員や友人、家庭との信頼関係が深まり、生徒が安心して生活できる環境が整いつつある成果だと言える。

• 「清掃活動」への責任感

「清掃活動に最後まで責任をもって取り組む（強肯定）」の割合は、全学年で 55.0% から 63.4% へと向上した。3年生においては 76.8% という非常に高い数値に達しており、無言清掃などの取組を通じて、公共の場を大切に作る心が確実に育っている。

• 学校生活への愛着と誇り

「学校生活が楽しい」とする生徒は全学年で約 8 割と高水準を維持し、さらに「吉原一中の生徒であることに誇りを持っている」という項目も 66.5% から 69.9% へと上昇した。

2. 今後の課題として取り組むべき点

学年が進むにつれての学習意欲の維持や、生活習慣の定着には課題も見受けられる。

• 3年生における「家庭学習習慣」の急激な低下

「家で学習する習慣がある（強肯定）」の割合は、1・2年生が維持、または向上しているのに対し、3年生は前期 54.6% から後期 33.5% へと大幅に低下した。特に「していない」と答える生徒が3年生で倍増しており、進路決定時期やその後のモチベーション維持における支援が、次年度に向けての大きな課題である。

• 「読書習慣」の停滞

「本を読む習慣がある（いつもしている）」の割合は、全学年平均で 22.3% から 20.9% へと微減し、依然として低い水準にある。情報の取捨選択や豊かな語彙力の基礎となる読書活動について、学校・家庭が連携した再刺激が必要である。

• 「自律的・主体的」な態度の育成

授業の振り返りや、自分なりに工夫して学習する項目（数学・英語など各教科の肯定割合）において、1年生で数値が低下する傾向が見られた。中学校生活に慣れた段階で、いかに「自ら学び、考える力」を継続させるかが今後のポイントとなる。

令和7年度 学校評価（保護者アンケート）前後期比較に基づく成果と課題について

1. 成果として捉えている点

今年度のアンケート結果からは、生徒の社会性の向上と、学校生活に対する高い満足度が顕著に表れている。

• 「あいさつ」への意識向上

「自分からすすんであいさつができています」という項目では、全学年平均の肯定割合が前期の88.8%から後期には90.4%へと向上した。特に3年生においては87.0%から90.8%へと伸びが見られ、最上級生としての自覚が行動に現れた結果と言える。

• 「粘り強く取り組む姿勢」の定着

「自己の目標に向かって粘り強く取り組んでいる」の項目では、全学年平均で前期68.8%から後期73.5%へと4.7ポイント上昇した。特に2年生（67.0%→71.9%）や3年生（70.3%→76.1%）において向上が著しく、学習や部活動、行事を通じて「あきらめない心」が育まれている成果だと捉えている。

• 学校生活への満足度と信頼の維持

「楽しんで学校に通っている」の肯定割合は全学年で92.0%と高い水準を維持している。また、「安心してお子様を任せられる学校か」という問いに対しても、全学年で94.5%の肯定的な回答をいただいており、学校と家庭・地域の信頼関係が強固に保たれていることが示された。

• 学習理解度の向上（3年生）

3年生において「学校の授業内容が分かっている」という回答が、前期の74.6%から79.6%へと5ポイント向上した。受験期を迎え、授業への集中力が一層高まった成果であると考えられる。

2. 今後の課題として取り組むべき点

家庭での生活習慣や地域との関わりについては、依然として課題が残っている。

• 「読書習慣」の著しい低下

「本を読む習慣がある」という項目では、全学年で50.9%から43.5%へと低下した。特に3年生では47.8%から28.2%へと激減しており、受験勉強の影響も推察されるが、豊かな感性を育むための読書離れは深刻な課題である。

• 「学習習慣」の定着不足

「家庭で学習する習慣がある」の項目は全学年平均で46.0%に留まっており、前期（47.7%）より微減している。自律的に学ぶ姿勢の育成は、本校における喫緊の課題である。

• 家庭での役割（手伝い）の減少

「すすんで家の手伝いをしている」という項目は、全学年で59.5%から56.3%へと減少傾向にある。特に1年生（64.8%→53.8%）の落ち込みが大きく、家庭生活における自立心の育成を支援していく必要がある。

• 地域社会との関わり

「地域の人にあいさつができています」は前期87.7%から後期83.8%へと低下した。また、「家庭で地域の良さを話題にしている」割合も48.3%と半数に届いておらず、地域の一員としての意識を醸成するための「地域連携」の在り方を再考する必要があると考えられる。